

北海道150年世論調査

北海道命名150年の節目に合わせ、北海道新聞社は北大の協力を得て郵送世論調査を行った。北海道への思いや道民気質の自己認識に加え、この150年で最も功績があった著名人の

北海道150年で最も功績があった人は(自由回答)

順位	名前	人数
1	松浦武四郎	68
2	ウィリアム・クラーク	24
3	町村金五	16
4	横路孝弘	11
5	島義勇	10
6	堂垣内尚弘	9
	鈴木宗男	
9	大泉洋	8
	黒田清隆	
10	黒田清隆	6

(敬称略)

(64)が並んだ。5位は札幌のまちづくりに尽力した開拓判官・島義勇(1822~74年)。6位タイには鈴木宗男元衆院議員(70)も入った。タレントの大泉洋さん(45)が9位で、挙げた人は全員40代以下。屯田兵制を創設した開拓使長官・黒田清隆(1840~1900年)が10位。

11位以下は、札幌農学校で学んだ教育者の新渡戸稲造(1862~1933年)、十勝開拓の祖・依田勉三(1853~1925年)ら。ロックバンドのGLAYやプロ野球北海道日本ハムのトレイ・ヒルマン元監督(55)と答えた人も複数いた。(小林史明)

功績ランキング 松浦武四郎がトップ

北海道命名150年の歴史の中で最も功績があった人を自由に答えてもらったところ、探検家の松浦武四郎(1818~88年)を68人が挙げ、2位以下に大差をつけてトップに輝いた。

江戸末期に6度にわたり蝦夷地を探索し、「北海道」の基となった「北加伊道」の名称を明治政府に提案した人物。道が記念事業のキーパーソンとして位置付け、各メディアにも取り上げられたことで、道民の印象に強く残ったようだ。

2位は、札幌農学校(現北大)の初代教頭で「少年よ、大志を抱け」の名言で知られるウィリアム・クラーク(1826~86年)。北海道の礎を築いたお雇い外国人の代表格として親しまれていることが分かる。

歴代知事4人も上位に入った。3位は公選2代目で自治相も務めた町村金五氏(1900~92年)。挙げた人は大半が60代以上だった。4位は同4代目で元衆院議長の横路孝弘氏(77)。6位は同3代目の堂垣内尚弘氏(1914~2004年)と、同6代目の高橋はるみ現知事

北大道新 連携協定

ついて尋ね、北海道がこの先50年、100年と歩みを進める中で重要になる地方自治の在り方についても聞いた。その結果からは、豊かな自然や1次産品を誇りとして北海道に深い愛着を抱く一方、行政や議会などに不満を感じている現在の道民像が浮かび上がった。



山崎幹根 北大大学院教授
調査結果について、北大大学院の山崎幹根教授(地方自治論)に聞いた。
(聞き手・佐藤陽介)

山崎幹根 北大大学院教授

地域再生を担うのは誰かとの質問で、知事と答えた人は12%にとどまり、道庁の存在感を感じないという回答も増えた。道民と直接向き合う仕事が少ないという事情を差し引いても、残念に感じる。

道は財政難で予算を削り、独自事業を減らしてきた。一方、地方創生のように市町村が中心になる取り組みが増えている。道は人口減対策やJ-RE北海道の問題、空港民営化など広域的な課題に腰を据えて取り組むべきだが、主体的な役割を果たす場面が見られず、今回の評価につながった。多選制限すべきとの声が半数を超えたのも、こうした状況と無関係ではないはずだ。道民も考えなければならぬことがある。道議や市町村議に

住民の意識変化も必要

期待する役割について、ともに「地元・地域要望の実現」「住民と行政の橋渡し役」が上位だった。いまだに「自分の願い事さえかなえてもらえればよい」との思いが強いというのだ。議会改革では、行政への監視強化や政策立案能力の向上が盛んにテーマになっている。今回の調査でも、情報公開や住民参加を訴える意見が多かった。自治の機能を高めたいのであれば、住民側の意識を変えなければならぬ。

北海道150年で功績があった人では、研究者や文学者、経営者など多彩な顔ぶれを期待していたが、10位以内に、知事経験者4人や島義勇に加え、元北海道開発庁長官の鈴木宗男氏が入った。いかに北海道が官主導で開発され、発展してきたか色濃く表している。

▽調査の方法 北海道新聞が北大との包括連携協定に基づいて6月14~7月10日に実施。北海道新聞情報サービスに委託し、道内の選挙人名簿から無作為に抽出した18歳以上の男女千人に質問票を郵送。回収率は66・9%。郵送による世論調査は「コンピュータで発生させた番号を基に固定電話に電話をかけて尋ねる通常の手法に比べ、回答者が都合の良いときにじっくり考えることができ、より信頼性が高い答えを得られる特長がある。記事、グラフとも小数点以下を四捨五入したため、合計が100%にならない場合がある。